第 7 章 印旛沼を観る人々

印旛沼は、古来、多くの人々が訪れ、生活し、沼を愛で、親しまれてきました。内田儀久は、主に文芸作品の中から「印旛沼が出てくる本」として 35 冊を紹介 [1] しています。これまで印旛沼は、人々にどのようにみられ、感じられ、接してきたのでしょうか。そして、親水の大切さが叫ばれている現在の印旛は、どのようになっているのでしょうか。その一端を垣間見ることにしましょう。

1 江戸時代の印旛沼

洪水と干拓の時代といわれている江戸時代にあっても、印旛沼を景勝地として愛でる人々がいました。そのうち、利根川図志 [2] にある 2 題について紹介しましょう。

［花島］　「北総第一の勝地なるべし」と称賛される景勝地 花島は、印西市（旧印旛村）の北印旛沼南西部に接するところにあり、印旛沼に浮かぶ島のように見えています。

図志には、「この山に登れば、西に富士山、……北を望めば筑波日光の山々、また北須賀村の水神の洲崎は江の牛の蛾眉（がび）（美人のまゆ）をなし、往来の高瀬船は白帆を揚げて八方に乗りちがえ、数万の漁舟は柳葉を散らすがごとく……」とあります。“島の頂上には弘法大師護摩修行の古跡の大日本寺があって、不動堂、護摩壇塚、独鈷水などがある”、と記しています。

現在もその面影を残し、島影は印旛沼の水面に美しく映え、往時の景勝地を忍ばせています。花島は、対岸にある北須賀の水神の森を中心とした甚兵衛公園と合わせて、親水の拠点として推奨されます。

［臼井八景］　利根川図志に紹介されている「臼井八景」は、佐倉市臼井の円応寺に伝わる元禄 11（1698）年作の「當山八景」という古文書のこと [3] です。作者は、臼井城最後の城主、臼井久胤の玄孫に当たる信斉と円応寺従職 宋的の二人です。序文 跋文に、信斉は「円応寺から望む印旛沼の景色は絶して、晴れてよく雨もまた趣があり、日中も夜も眺めていて飽きることがない」と記し、宋的は「湖畔のこの多景に詩人の詩がなく、歌人の歌がないことは、この地にあるべきものが欠けているということです。もしこれを補ってやらなければ、風流人の罪ということでしょう。」といっています。そして二人は、中国の瀟湘八景になぞらえて八つの風景をそれぞれ漢詩二篇と和歌一首で綴っています。なお、琵琶湖の近江八景、相模の金沢八景も、瀟湘八景になぞらえて作られています。

臼井八景は、「舟戸夜雨」「遠部落雁」「飯野暮雪」「師戸帰帆」「瀬戸秋月」「城嶺夕照」「光勝晩鐘」「洲崎晴嵐」の八つの景色を詠んでいます。その中から、師戸帰帆の和歌一首を紹介しましょう。

もろ人の　諸戸の渡り行く舟の　ほのかに見えて　かえる夕暮　―― 信斉

水墨画のように、ゆったりとした時が流れる雰囲気を感じます。

現在も、印旛沼湖畔に臼井八景の歌碑や説明板が建てられ、沼の風景に奥深い味わいを添えています。

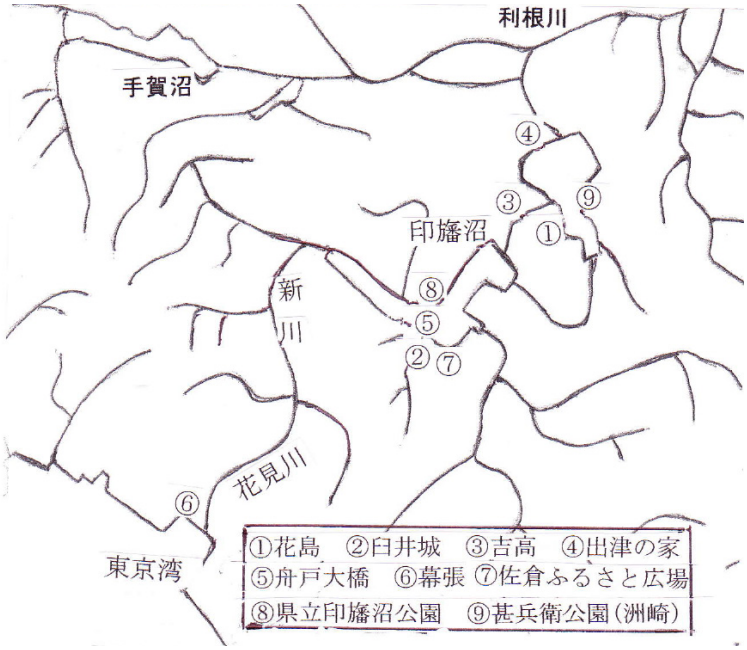

図 7-1　印旛沼を観る人々の位置

2 明治以降の印旛沼

［水野葉舟の感想］　総武本線が開通して間もない明治末期に、時々印旛沼を訪れた水野葉舟という文人がいます。彼は、明治 16 年東京府士族勝興の長男として生まれ、早稲田大学政治経済科を卒業し、民俗学に興味をもった人物です。彼は、印西市（旧印旛村）吉高にいる文学仲間の富井氏を訪ね、初めて見る印旛沼の印象についてこんな紀行文 [4] を書いています。

「初めて印旛沼の水の色を見たときは、水の死んだ色を感じた。十月の雨の降る黄昏の明るさの中で、濁った灰色の水の広く湛えている沼の一部を見たときには、私の心は鈍い痛みに似た沈鬱な恐怖を感じた。……」と。印旛沼は、彼にとって寄り付きがたい暗い存在に映ったのでしょう。

しかし、何回か通っているうちに、富井氏の飾らない心の温かさとゆっくりと時の流れる心地よさを感じはじめ、「あの静かな水が、心を誘う。沼の水草と、水に浮かんでいる鳥と水にうつっている丘の林と……こちらの岸から渡しを渡った先の茂みの中に籠もりかくれた生活と、美しい自然とにしきりと誘い立てられる。」と言わせています。

印旛沼は、決して派手な存在ではなく、自分自身が自然の中に溶け込んでいくうちに安らぎに似たよさを彼に感じさせたのでしょう。彼は次第にその雰囲気にひきつけられ、ついに東京から印旛の地に移り住むことになります。

印旛沼は、周りに高い山々や丘陵がなく、平坦な台地が続くばかりで景色に中心となるものがありません。その代り、人をのんびりとさせるところがあり、長くそこにいても疲れを感じさせません。葉舟は、そこに気が付いたのでしょう。

［吉植庄亮の見方］　新田開墾で有名な吉植庄亮（第 5 章3 ）は、7000 首を超す歌集 [5] を遺すほどの歌人でもありました。千葉県文化会館には、県政百年記念事業（昭和 47 年）として、郷土歌人 吉植庄亮、伊藤左千夫、古泉千樫 三人の歌碑が建てられています。

よる波の　そのまま凍りはてにける　渚はながし　印旛大沼　　（吉植庄亮）

庄亮の観る印旛沼は、重厚で堂々としています。

また、宗吾霊堂には、次の歌碑が立っています[6)]

紅水鶏（べにくいな）　また静けくも鳴きいでて　見渡す限り青田夕風

この歌は、印旛沼のほとりで彼の開墾した水田の稲穂がなびくさまを詠んだものでしょう。広々とした静けさの中にも満足感が漂っています。

彼は、大正 12（1923）年、北原白秋、古泉千樫、尾山篤二郎、橋田東声、吉植庄亮の 5 人で千葉県歌人大会を催し、翌日に旧本埜村の自宅（出津の家）に招いて即興歌、短歌を作り、「橄欖」にまとめて発表しています[6)]。

はろばろと　芦野かけて湛ふれば　空より明し大き印旛沼　　（白秋）

庄亮は、多くの文人を印旛沼に招き、 特に白秋は時々訪れていたようです。白秋の民謡集「あしの葉」[7)] の中に、その時の素晴らしい情景の作品や後に出津の人たちに贈った唄が、多く含まれています。

彼は、新聞記者の時代に、「…劇しい忙しい、わけても政治記者のような殺風景な生活にも、こっちの心持ちひとつでその生活の中から詩を生み歌を生むことができるものであることを知った。」（歌集「くさはら」巻末言）と述べているように、印旛沼のほとりで新田開墾をしている中でも歌心を忘れませんでした。

開墾（トラクター）　光りかがやく 玄土（くろつち）の　大き切片を放り出しゆく

背中より　伝わる土のあたたかさ　青き大空にひたり眠むとす

百姓仕事に疲れ切って大地に寝たとき、揺りかごのように百姓を憩わせてくれる土の暖かさに浸りきっています。彼は、土を暖める日の光を「都会人には想像を絶した慈光」と表現[8)] しています。そして

春になりて　百姓はまこと 怡（たの）しもよ　田螺（たにし）鳴き野に 雲雀（ひばり）鳴く

早苗田に　鯉あがりいて少女らの　おどろき愉しみ声に呼びあふ

新墾田の　稔りの稲振りの手さばきつかず　大長垂穂（おほながたりほ）

などなど、春には多くの生きものたちの柔らかい静かな声が百姓たちにくつろぎと希望を与え、秋には収穫の感激にひたっている様子が、実体験として表現されています。印旛沼は、このような過酷な百姓仕事と自然の慈悲の世界に囲まれているのでした。外から見ていてはわからない印旛沼の世界が、ここにありました。

［椎名誠の感覚］　　都市化が進み、川の汚れがひどくなってきた昭和末期に、印旛沼から新川・花見川をカヌーで訪れた椎名誠のエッセイ[9)] あります。彼は、花見川河口近くの千葉市幕張に生まれ、幼少のころ、印旛沼に訪れたことがあります。水面の下で水草がじっと動きを止めているのを見て、これが「湖」でなく「沼」の表情だと直感した思い出を抱きながら、西沼の舟戸大橋から出発しています。（図 7-1参照）

彼は、タナゴを釣るガキ男児や、マガモが水面を泳ぐ姿を見たり、ゆっくりと吹く風に当たりながらいい気分になって、「夕闇が迫ってきたけれど､そのままずっと舟をこいて川下まで下りていきたいような気分」でした。

翌日、その続きを漕ぎ出すと、新川を下るあたりから高圧線が多くみえてきます。町の

騒音は聞こえないけれども「全体に田舎そのものの田園というよりも、ジリジリイライラと浮き足立ってしまった田園地帯」という印象を受けます。

国道 16 号を過ぎると、急に川は汚くなり、発泡スチロールや空き缶などが目につきはじめ、「人が生活するところにくると、もうテキメンだ」「多摩川はもっとひどい」と言いだしています。

不思議なことに、川が汚れてくると、釣り人が目立ちはじめます。釣り人は実に陰気に見え、「“何かとれるか”と聞くと“カヌーが通るから釣れねー”と返事があった」と人まで変わっていることを感じていました。

花見川は悪臭に満ちたドブ川で、化学薬品と人の排せつ物のまじった臭いがする。しかしその両側の景色はなかなかいい感じで、左岸に自然探索サイクリング路がある。彼は、「ドブのような水を流しておいて、何が自然探索か」と嘆いています。

彼は、自然豊かなところに人がわがままに住みはじめ、都市化によって水の汚れていく生の姿を感じ取っています。当時は、生活圏から出る排水やゴミが、水と一緒に川に流されていました。昭和末期は水の最も汚れていた時期であり、印旛沼に暗い影を落としていました。

3 現在の印旛沼

江戸時代の風流人の観る印旛沼、明治以降の文人や働く田園地帯の印象から都市化の進む地域へと移りゆく印旛沼を観る人々について見てきました。現在は、都市化に伴う水環境の悪化を防ぐ対策が進み(第 11 章・第 13 章 2)、椎名誠の見た見苦しい光景はなくなりました。

現在の印旛沼は、いろいろの人々がそれぞれの思いを胸にして接しているので、沼を見る目も多角的です。そして、印旛沼に集う人々は、みんな印旛沼が大好きな人達です。

［風景・自然を楽しむ人々］　印旛沼は、昔からフナ釣りのメッカです。ヨシ原に囲まれて魚と戯れています。とくに、春のノッコミの時期は、釣り師でにぎわっています。愛鳥家は、朝のねぐらから飛び立ったばかりの姿を追い求めています。野草のかれんな花を求めて散策する人もいます。

朝霧の水面や夕日に赤く染まった風景など、四季により時刻によって移りゆく沼の姿は、人の心を魅了しています。悠然と絵を描く人がいます。写真愛好家は、好みのスポットに立って素敵な瞬間を切り取っています。傑作を集めた印旛沼の写真展は、随所で開かれています。

［体を動かす人々］　印旛沼は、解放感に満ちています。ジョギングや散策などをして思い思いに体を動かし、沼辺で一汗かくのを楽しむ人々がいます。岸辺には、延長 22km に及ぶ県道八千代印旛栄自転車道（サイクリングロード）があります。この自転車道は、新川・花見川沿いの遊歩道を経て、ほぼ利根川から東京湾まで通じています。

また、西沼畔には、オリンピックで金・銀に輝く活躍をしたマラソン選手 高橋尚子・有森裕子が小出義雄監督のもとにこの地で育ったことを記念して、尚子コース(10km)、裕子コース(13km)があります。春の佐倉朝日市民マラソン（フルマラソン）のルートは、印旛沼のほとりを通過しています。みんな印旛沼の雰囲気を背景にしたものです。

［イベントに集う人々］　　印旛沼のほとりに、オランダ風車のある「佐倉ふるさと広場」があり、春にはチューリップ祭り、夏には国際花火大会が開かれます。休憩所や貸自転車を利用する人々を合わせると、年間来訪者は 50 万とも 100 万とも言われています。

写真 7-1　沼辺のチューリップ祭り

［史跡を訪れる人々］　　印旛沼のほとりには、たくさんの史跡や施設があります。旧印旛村（現印西市）にある県立印旛沼公園は、沼に突き出したような高台にあります。ここは戦国時代の師戸城址です。歴史を思い浮かべながら空堀をめぐらした城址を散策する人、印旛沼を眺める人、春の桜を楽しむ人などが絶えません。対岸には、師戸城の本城に当たる臼井城跡があり、往時をしのばせる風格を備えています。

北印旛沼の甚兵衛公園は北須賀の水神の森ともいわれ、佐倉宗吾郎を船で対岸まで渡したところで、松の老木が生い茂り、遠くに見える筑波山とともに景色のよいところです。ここは、数々のイベントを行ったり、写真愛好家や鰻を食べに来る人たちが大勢集まるところです。先に述べた花島を含めて、観光の拠点としてお奨めです。

その他、数々の古墳や由緒ある神社仏閣（第 3 章参照）があり、国立歴史民俗博物館・県立房総風土記の丘などなどがあって、歴史愛好家が大勢訪れています。

［屋形船に乗る人々］　　印旛沼は、屋形船の航路が設定されています。水面から岸辺のヨシ原越しに沼を取り巻く台地を見ると、平坦で低い台地が高くそびえて見え、景色を引き立てています。人々は、解放感に浸りながら雑談を交わし、童心に戻って揺り籠に身を任せています。

写真 7-2　印旛沼をめぐる屋形船

屋形船に乗る人は、観光ばかりではありません。鳥や水草・魚などの自然観察や、水質の状況を直接観察しながら環境保全の勉強に訪れる人々が大勢います。印旛沼を肌で感じ、将来の姿を思い浮かべながら、印旛沼と人とのよりよい関係を保つために、自分で何ができるかを考えようとする人が増えています。

［ボランティア活動をする人々］　　印旛沼の周りには、たくさんのボランティア活動をする人々がいます。ゴミ拾いをする人、水質浄化に役立てようと水草を育てる人、遊歩道沿いに桜の木を植え管理する人、印旛沼に集う人々に沼の現状を案内する人、などなどです。みんな、印旛沼をこよなく愛し、自分のできることから率先して行っています。

現在の印旛沼に集う人々は、自然や風景を楽しむ人、息苦しい都会生活からホッとするひと時を求めて来る人、自分たちでもっとよい環境を作ろうと努める人、等などです。

現在の印旛沼は、決して暗いものではありません。洪水などで暗く思われがちな印旛沼は、すでに過去のものとなっています。急激に進んだ水の汚れは、危機的な状態から脱しつつあります。明るい印旛沼の親水性は現代社会の求めるところであり、それに近づいています。

［余話 6］印旛沼の名称について

”印旛沼”という響きは暗い、もっと明るい呼び方はないか、そんな声がよく聞かれます。印旛沼という呼び方は比較的新しく、江戸時代頃に定着したようです。

印旛沼の「印旛」について、奈良時代（8 世紀）に書かれた常陸風土記に、下総「印波」とあります。和名抄・延喜式には「印幡」「印播」ともあります。古代の早い時期には、その中でも「印波」が多い [10] ようです。

印旛郡誌 [11] には、印旛湖名称の起源は詳らかにできないけれども、回国雑記（文明 18

（1486）年）に「稲穂の湖」とあり、稲穂は印旛の一転声であって、当時まではインバといっていなかった、「印旛は稲庭の義なり」”とあります。また“「印播は稲場の義」であり、古い「印波」「印播」は、みなこれに通じる。”とも言っています。印旛の地方は、古くから水田地帯であったからでしょう。

印旛の「旛」は、漢和辞典によると「バン」「はた」と読み、「長く垂らしたしるし旗」とあります。出陣のときに景気づけに掲げる布を長く垂らした旗のことです。平成の天皇即位礼のときに黄旛 白旛がたくさん沿道に並んでいたことを思い出します。多分、印旛沼の形がW型をしていたことから、風になびく勢いのよい旗を連想して「旛」の字を当てなのではないでしょうか。

「沼」は、「ドロ沼」を思い出して暗いという声は、江戸時代からあったようです。江戸時代の佐倉風土記にこんな記事があります。”俗に沮沢(ショタク)(湿気の多い土地)というので沼といっている。昔は印旛沼とも、印旛湖とも言っていた。……沼や湖は郷語（里言葉）だから、江を用いるがよい。……浦というのもよい。……“と。

また、印旛郡誌には、随所に「印旛湖」と書いてあります。図 1-4（第 1 章）に、印旛沼が古鬼怒湾から分離独立する直前の名称として「印旛浦」とありますが、これは、最近になって誰かが使った名称でしょう。

司馬遼太郎は、湖・沼の呼び方について、こんなことを言っています[12)]。“スコットランドでは、沢山ある湖沼を、レイク（lake）と言わないで、ロッホ（loch）と呼んでいる。レイクというと、スイスの湖のようなものを連想する”。そして、“loch の「ch」という発音は英語にはなく、スコットランド人の祖先の人々の言葉、つまり土着の匂いのする言葉”とも言っています。スコットランドの人々は、それを誇りとして「ロッホ」と言い続けているのです。

日本の「湖」という言葉につて、彼は、明治以後にはやったヨーロッパ語の「lake」の対訳としての、ハイカラ語[12)]だと言っています。湖といえば、山に囲まれた人里はなれたきれいな「水域」、その代表はスイスの湖沼のようです。

「印旛沼」は土着のもの、歴史を背負って地域に密着した「ドデン」と座っているもの、人里離れたきれいな「湖」ではなく、人と長く付き合ってきた「印旛沼」だと思います。「印旛沼」という名前は、誇りをもって使っているうちに品格が備わってくるでしょう。

文献

1) 内田儀久（2003）：電子図書館満開佐倉文庫、中央公論事業出版
2) 赤松宗旦（1938）：利根川図志、岩波文庫
3) 立原三知男（1999）：印旛沼周辺の風景を詠んだ「臼井八景」、印旛沼―自然と文化 №6、（財）印旛沼環境基金
4) 水野葉舟（1984）：沼の思ひ出、葉舟会
5) 吉植庄亮（1970）：吉植庄亮全歌集、柏葉書院
6) 鬼川太刀雄（1995）：印旛沼は年古りた銀、近代文芸社
7) 北原白秋（1987）：あしの葉（初版、1924、アルス）、白秋全集 29、岩波書店
8) 吉植庄亮（1946）：百姓記、土とふるさとの文学全集（7）、家の光協会、（1976 刊）
9) 椎名誠（1990）：ロシアにおけるニタリノフの便座について、はじめての川下り、新潮文庫
10) 日本歴史地名大系千葉県の地名（1996）：平凡社
11) 千葉県印旛郡役所（1913）：千葉県印旛郡誌（1989 年復刻版）
12) 司馬遼太郎（1991）：春灯雑記、仄かなスコットランド、朝日新聞社